

## 企業の社会的責任に思うこと

秋山 幸雄

産業医科大学 産業保健学部 環境マネジメント学科

〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1

最近、CSR(Corporate Social Responsibility, 企業の社会的責任)という言葉が新聞雑誌やメディア媒体で見聞することも稀ではないと思います。これは、企業は利益だけを求めていけばよいわけではなく、環境や社会問題にも責任を持つべきであるという考え方です。CSRにより自社の評価が高まり、企業の価値は増すと考え、積極的にCSRに取り組む企業が増えてきています。CSRでは企業倫理や企業統治も重視されることから、CSRを徹底すれば企業不祥事は起こりにくくなり、リスクマネジメントに役立つとも言われています。

CSR活動の側面については、トリプル・ボトムラインと表現されます。ボトムラインとは決算書の最終行、つまり、収益・損失の最終結果を意味する言葉です。これからの企業経営は、「経済」のみならず、「環境」・「社会」を含めた3つのボトムラインを見て、バランスさせていくことが持続的発展のために重要であるとの考え方です。

経済的側面とは、健全な企業運営を行い、着実に利潤を上げていくことです。

環境的側面というのは、地球環境問題や資源問題への配慮です。二酸化炭素の排出量の減少への取り組み、排水、リサイクルなど、最近特に注視されています。

社会的側面とは、地域社会、顧客、従業員などに配慮し、共存共栄をはかろうとすることです。よくアメリカの企業などでは、発展途上国で未成年労働者を長時間働かせて安い製品をつくらせて売るといった批判を受けたことがあります。そのような企業は許されなくなります。

以上の3つの側面が企業活動の中で年々重要性を増しており、パブリシティに大きく取り上げる会社も増えてきています。企業としても、負担に見合う、企業イメージやリクルートへの効果は期待して当然でしょう。

しかし一方で、このCSRには果して企業経営上、それほど見返りがあるのか？ という疑問も根強くあります。この疑問への解として「戦略的CSR」とい

う考え方が注目されています。これは、企業の競争戦略論で世界的第一人者であるハーバード大学院のマイケル・ポーター教授が提唱しているもので、企業はCSR活動を事業戦略と一体化することで、新たな競争上の優位を手にすることができるということです。しかもそれは長く持続することができるというのです。

こうした企業の社会的責任は主に外向きの話です。今後もっと真摯に考えられて良いと思うのは、企業内の、労働者への責任です。現在問題となっている非正規社員は、正に経営的及び社会的責任を果たす見地から、待遇処遇の改善は考えられて当然でしょう。そして、労働環境は働く者にとって、報酬に次いで大事な問題です。勿論、いわゆるCSRのポイントが高いような企業の場合、労働環境整備も進んでいます。ISO認証取得を見学者コースに掲げて誇る工場も少なくありません。しかし、室内空気に対する配慮までとなると、まだまだという気がします。ある意味一番大切な環境でありながら、機械の安全性や排水の処理等に比べ、それほど大切に扱われているとは言えません。一例を言えば、「社内は全面禁煙にし、喫煙は屋外で」とする企業が増えてきていますが、これは喫煙率を鑑みて、フェアな方法でしょうか？ まずは分煙のやり方を検討してほしいと思います。

また、科学者の社会的責任も、これからもっと論議されて良い問題ではないでしょうか。原爆投下や、水俣病を筆頭とする多くの公害など、歴史的な事件に関しては今までも、問われてきました。しかし、それだけで済ませられるのでしょうか？ より良いデータを出すのが、社会への貢献でしょうか？ 目的が善であれば、研究過程で、環境への配慮は犠牲になっても仕方ないのでしょうか？ といって、動物保護を謳うからといって、動物実験は廃止が可能でしょうか？ そういう見地で個人として、又組織や集団で、色々考えるべき事があるのではないかと思います。